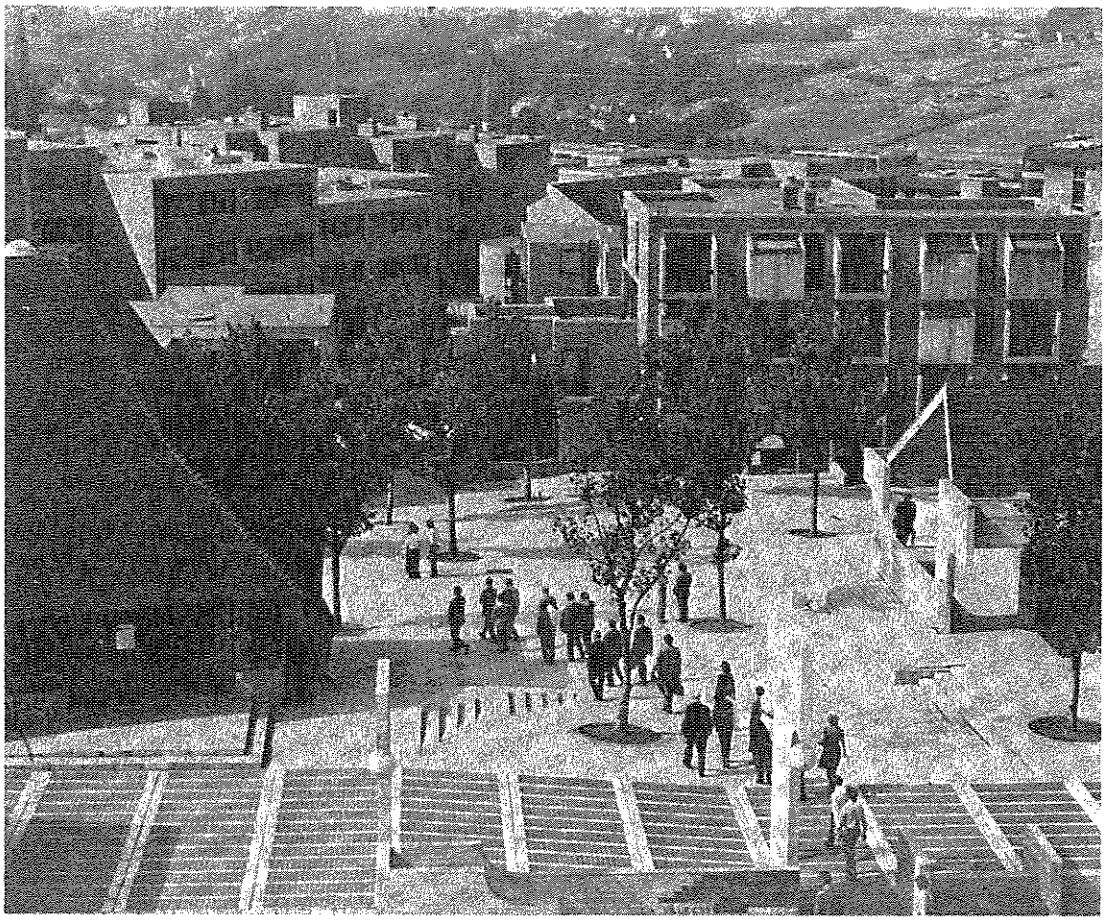
No. 3　　1984年1月1日

ARPA・K NEWS LETTER

地域計画・建築研究所



ベルギー　ルーバン・ラ・ヌーブのサイエンス広場（本文8ページ）

もくじ

・あけましておめでとうございます…… 2
・「人と車の共存道路」をヨーロッパに見る①…… 7
・ヨーロッパの学研都市②…… 9
・きんきょう　○あっと驚くハイポニカ農業ーおいしいトマトは頭上になる…… 14
　○〝観光より健康ーそして観光〟
　浜坂町〝健康づくりの里〟構想その後…… 16
・一知半解　○ごみはなぜ増えるか…… 19
・まちかど　○水島港のサイン…… 20

あけましておめでとうございます

三　輪　泰　司

今年は、甲子（キノエネ）の年でものごとの始まりの年であるといった意味のことが、いろいろな形で云われると思います。

ARPA・Kは今年で創立18年目。ひとめぐり60年でいえばまだ3分の1ですが、シンク・タンクとかコンサルタントとかいう職能が発生してからの20年そこそこの歴史からいうと老舗（シニセ）の部類に入ってしまいました。

年の初めにあたって、この歴史を大切にすると共に、歴史をこえて新しいチャレンジとレニューアルをめざす抱負と決意など述べなければならないと思います。

今年私たちをとりまく状況でかなり明確になってくる問題があるでしょう。

関西では、まず新国際空港とならんで文化・学術研究都市建設構想が「国際高等学術研究所」のイメージあたりから焦点が結ばれてくるでしょう。また大阪の21世紀計画は昨年秋にスタートしましたが、京都では平安建都1200年記念事業が姿を表わしてくるでしょう。

こうした状況の中で、私たちも責任が重く肩にかかってくるものと覚悟しております。

恒例の年初の全所ミーティングで、まずこのような状況について認識を新たにすることを全員に要請し、私たちの職能がますますきびしく問われる中で、めいめいの位置と目標について、組織全体の目標と戦略について全員の意見をききます。

シンク・タンク、コンサルタント、設計事務所といっても本来、「サービスして報酬を頂く」ことによって存立する職能です。何万台の生産をして販売するといったような目標をもつ仕事ではなく、まずは使ってつきあって何かトクする、事業にあたってシステムやデザインで何かの価値をつけ加えたり推進に役立つ、そして、その度合を高める、といった判ったような判らないような仕事ですが、とにかくは、集ってきやすいところにしたいと思います。そしてそれを支えられる事務能力や財政力をたかめたいと思います。

実際には昼も夜もないひどい肉体労働の場なのですが、ひとりひとりが、仕事を面白くして生き生きしているところにこそ〝集ってくる〟魅力がかもし出されると思います。

それには、各人が自分のことしか考えられないSelf の段階からまわりの人間との関係も考えて仕事をしようとするFellowship の段階、さらに仲よくするだけから共同社会の進歩のために仕事を通じて社会に奉仕しようとする Service の段階に高めるようになりたいと思います。

「健康」であるためには、ひとつひとつの「細胞」の活性化と身体全体の活性化がうまくゆくことが大事であるように、都市も小さな地区で愛情をこめてすゝめられるまちづくりの活動と全体の方向が大事ですし、ARPA・Kもひとりひとりの自覚した活性化と全所の体質改善と健康をはかり責任にたえられるよう努めたいと思います。総勢50人どうかよろしくお願いいたします。

（みわひろし　代表取締役社長）

□京都事務所

調査チーム

私達のチームは、① 住宅に係る調査及計画、② 都市計画に係る調査及計画、③ 地域総合整備に係る調査及計画、を主要な柱として業務をすすめてきました。今年は、この3つの柱ごとにコンサルタントとしての専門性、総合性を一層追求しつつ、住民のくらしと営業を守り発展させるという基本的視点から、調査や計画のあり方、進め方についても一定の成果を得たいと思っています。

松島茂木

計画チーム①

我がチームの主な仕事は、事業化につながる計画づくりです。そして、計画づくりの基本的考え方は、〝なるようにする〟というところにあります。計画をつくる地域の歴史とその将来を見極めることから仕事は始まります。そこに必然の流れを見つけだしたなら、計画の大半は完了したといっても過言ではありません。そんな訳で、昨年一年間、「日本地誌」「日本図誌大系」「京都の歴史」「住宅地図」といった資料には大変お世話になりました。今年は、そのお返しに、これらを系統だてて整理し、地域をして語らしめる資料（京都版）をまとめてみたいと願っています。

斎藤侑男

計画チーム②

地域、施設の総合的な計画づくりと個々の施設の事業化に向けての計画、設計等の業務を主として担当しています。メンバー構成は、土木、建築及び環境計画と幅広く、扱うスケールも設計レベルから地区、都市レベルにわたり、現実的な対応と柔軟な考え方の両面からのアプローチに取り組んでいます。我々に求められている計画づくりには、夢を描くと同時に確かなプランが求められていると言え、全員の持ち味を生かした役に立つ仕事をモットーに頑張っていきたいと考えています。

山田克雄

建築計画・設計チーム

建築計画から設計・監理までの業務を主として担当しています。扱うスケールも1／1～1／2,500と幅広いことや、他チームに比べて仕事の実現化も早く、シビアーに評価される緊張の中で取り組んでいます。主な仕事としては、教育施設（キャンパス整備）、医療福祉施設、団地計画、実施設計・監理業務があります。また最近は、歴史的環境整備に関わる仕事にも携り、増々幅広い技術と総合力が求められています。今年も全員精いっぱいガンバルつもりです。よろしくお願いいたします。

北条　誠

昨年は、高等学校とはどうあるべきかを設計を通じて創ってきましたが、今年は、それを現実のものにしていく（作る）ために、どう「創る～作る」へフィードバックさせていくかが課題だと思います。

山口直人

市町村の総合計画策定から、年ごとに守備

範囲が広がり、産業、健康、文化、ごみ問題など重要な各論的テーマに足を踏み入れてきました。今年もまた、新たなテーマに挑戦し自治体職員のみなさんや大学の先生方、専門家達との出会いを大切にする姿勢で行きたいと思います。

高原　稔

いよいよ30歳代に突入しました。何故か20代は建築がせわしなく僕のまわりを通り過ぎていったような気がしています。30代は1つ1つの建築をしっかり受け止め、じっくり取り組みたいと思っています。

高坂憲治

1984 年のターゲット、① 新しい分野への挑戦。"絵"をかく仕事を1本はやってみる。② 理論化のための勉強をする。過去経験した仕事に脈絡をつける。特に、都市農業論？③ 知識の幅をひろげる。研修などへの積極参加。

松本　明

あっという間の2年間でした。今年は何か心に残る1年間にしたいと思っています。ヨットでは、どんなレースでもいいから、6位以内にはいりたいと思っています。

西田昌治

昨年は、入所したばかりで右も左もわからず、事務所内でバタバタしているだけといった印象でした。今年は是非とも、足を動かしていろいろ見てまわり、現実のフィールドの中で力をつけてゆきたいと考えています。

横山伊知郎

ＡＲＰＡ・Ｋ１年生としての今年は、竹藪の中を駆け廻り、本年末には桃山の陵に京人形然とした、「新生橘女子高校」を世に送り出したいと思います。

前田恭宏

□大阪事務所

―― 地域・施設計画チーム ――

地域・新都市開発整備計画、都市計画策定調査、市街地整備計画、都市再開発計画、公園・緑地計画、観光開発計画等を担当しています。また、総合的な視野を広げるため、市町村総合計画にも取りくんでいます。京阪神大都市地域を大阪から見るようになって7、8年になりますが、大阪ばかりでなく、京都から眺めたり、兵庫や和歌山から眺めたりしているうちに、いくらか分ってきた気がします。今後は、市街地再整備の問題に力を入れていきたいと全員張り切っています。今年もよろしくお願いします。

山口繁雄

―― 交通計画チーム ――

交通計画・港湾計画・都市計画・地域計画の業務を担当しています。今年は、これまでの成果を土台に、住みよい都市づくりに役立つコンサルタントをめざして、計画技術の向上に努力していきたいと考えています。

私個人としても、昭和49年に入社して10年。

北は北海道から南は沖縄まで、各種の調査・研究・計画の業務を経験しました。今年は、これらの仕事に区切りをつけて、新たな10年の第一歩としたいと思います。

杉原五郎

毎日、桃山城と大阪城を往復しています。僕にとっての大阪は、テンポの早い町、ズケズケ言う町、そして夕陽のきれいな町。そんな大阪で、夕陽に感動する日を一度はもちたい、人の心を動かすような仕事がしたい。

伊坂善明

総合計画・環境調査チーム

市町村総合計画とごみ問題、水問題に没頭する毎日です。今年も、よりよい地域づくりと環境づくりのため、皆さんのお役に立ちたいと思っています。どうぞ、よろしくお願いいたします。

重本幸彦

これまで入所以来3年間、雑多な仕事をしてきました。宅地開発あり、まちづくりありで、主に計画の仕事をしてきましたが、これからは、事業を勉強していこうと思います。また、プランナーの職能形成についての議論も展開しようと思います。

藤田武彦

昨年、京都から古巣の大阪へ戻って来ました。やはり大阪は親しみを覚えるとともに厳しさが身にしみます。この大阪をベースに、地域に密着した場面でプランナーとして役立てるよう頑張ります。

馬場正哲

今年は、いよいよ4年目ということで、少しばかり転換を図りたいと思います。何度も言われていることですが、仕事をこなすことから、意識的に取り組むことができるようになればと考えます。

為国豊治

コンサルタント技術者として、早くも5年めが過ぎようとしています。この間、かなり背伸びしてやる仕事をさせていただきましたが、これまでの背伸びを財産に、「○○の仕事なら彼に」といわれる技術者に脱皮したいと思います。

森脇　宏

年始には、なぜか抱負を語るのが慣習化しています。そして今年も仕事に精出しますと言えば、これまたきわめて当たり前、でもそうは言いません。「いかに人間らしく生きるか」これが私の課題です。

久郷幸夫

京都は、自分の古里でも〝今里〟でもあり、ぜひ〝新里〟にもしたいと思っています。この京都と仕事の〝今里〟である大阪とにコンパスの中心をおいて、個性的なふるさとづくりをめざして頑張ります。

小阪昌裕

コンサルタントの仕事を始めて今年で3年目を迎えます。今年の目標は、時間の有効的活用を図ることにより、その時間の成果が自己に蓄積される1年を過すことです。

岡本祥浩

□名古屋事務所

事務所開設2年目を迎える事ができました。応援や心配をして下さいました皆様有がとうございます。昨夏頃はどうなる事かと一喜一憂の毎日、身の細る想いで白髪も増えましたが、どうにか新年を迎える事ができました。

名古屋地域で何かお役に立ちたい、そのためにはっきりしたテーマを持たねばと考え、あちこち駆けまわり、人に会い、話しをするうちに、何とかお役に立てそうな道筋も少しばかり見えかけてきました。

当面は従来からのテーマである都市景観の他、大都市インナー問題、基盤整備の概ね完了した名古屋の成熟した都市、新しい伝統の創造を柱に、また今年も日々一喜一憂で頑張ってゆきます。今年もよろしくお願いします。

尾関利勝

転勤して3ケ月が過ぎ公私共に忙しくなってきました。仕事や日常生活を通じ沢山の人と知り合い、同時に名古屋や岐阜の街をわずかながら知りつつあります。今年はこの調子でもっと外に出て廻り、より多くの発見と冒険を求めてがんばりたいと思います。

内村雄二

□九州事務所

九州事務所もやっと定着の兆が見えてきました。今年こそは飛躍の年にしたいと思っています。みな様方のお心ぞえに感謝しています。今年もよろしくお願い致します。

嶋田剛之

年末にはいつも通り、地元の人と「来年こそは再開発の事業着手の年にしよう」と言いつつ、忘却の酒を飲み明けて迎えた3度目の正月です。またも今年こそはと燃えています。

永田伊津夫

地方の時代と言われて久しいが、きびしさの中に、まちづくりの可能性が広がっていると思います。今年もよろしくお願いします。
ー桜島の噴煙を眺望しつつー

伊集院豊麿

「去年今年、貫く棒の如きもの」という句が耳に残っています。私は、この俳句のように正月が来ても身辺にそれ程変わりがありませんが、今年は「何かにこだわる年」にしようと思っています。

山田龍雄

やるもやらぬも自分次第、やってもやっても尽きない仕事。今年も頑張ります。よろしく／

山辺真一

"石の上にも3年" 今年は私の年……と言い続けて早3年。そして入社3年目、今年はゆとりあるあせりと決意＝ステップの年になりそうです。

吉村孝子

「人と車の共存道路」をヨーロッパに見る①
オランダのニュータウン

道　家　駿太郎

住宅地区内の道路を生活の場として再生させる試みが各地で始まっています。オランダのデルフト市に始まる「ボンネルフ（Woonerf）」が有名ですが、西独でもすでに各種の試みが行われ、すでに実験段階を終り法制化もされ、定着化も始まっています。

本年の9月中旬、オランダ及び西独における歩車共存道路の実態について視察を行ってきました。

ヨーロッパにおける都市交通対策の中で、車への対応は大きな課題ですが、都心部の車の混雑解消と並び、住居地区内での車の制御も大きな課題となっています。

車の流入を制限したり、走行スピードを低くおさえることに依り、道路の歩行者空間化を進めることがこの試みの主眼となっており、併せて車の通行を防げるため設けられる街路樹や、プラワーボックス、ベンチ等によって街並を美しくする効果も狙っています。

ボンネルフの先輩格となるオランダでは、既存市街地の路盤が砂地であって沈下が多いせいか、ほとんどの街路がレンガ又は着色コンクリートブロック（インターロッキング）の材料で出来ていて、レンガ造の街並と調和しており、日本の歩行者専用路や苑路的雰囲気をもともと持っています。この特徴を生かして美しい共存道路を作り出している地区が、デンハーグ市に近いライズバイク市（Rijswijk）にあります。ここでは古くからの中、低層住宅地内にある約20m巾員の道路をボンネルフ化しており、古い並木を生かして、道路中央部の木立を縫う様に車線をジグザグレーン化して見通しを防げ、車のスピードが上らない様な対策としています。車線部をレンガ色、その他の駐車スペースやモール部分を黄色や市松にと単にインターロッキングの色で区分けするだけで構成されており、アスファルト道路を見慣れた目には公園の中と見間違う環境となっています。

ライズバイクの通り

古い街の改造と並んでニュータウンでもこの考え方は積極的に進められており、アムステルダムの北方で建設中のアルメール（Almere）や、デルフトの郊外で建設中のタントフ地区（Tanthof）で、より徹底して進められています。

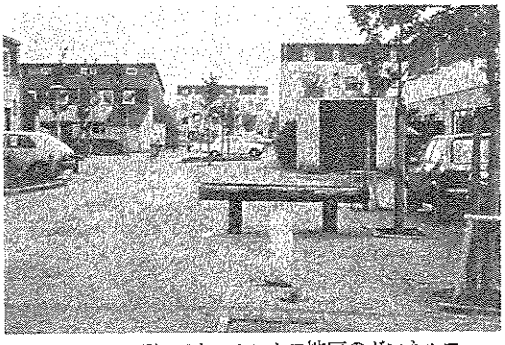
特にタントフ地区では近くに建設された高層型のニュータウンの評判が悪かったせいか、古い街並と似た、ストリート型低、中層住宅が主で、住戸が直接道路に面して建てられています。その道路も、いわゆる車線のはっきり区別されたものと異り、建物と建物の間が全部レンガ様の材料で舗装された広場、と呼

んだ方が相応していて、その中を車の止まるスペースや、車の通るスペースが、植栽、ベンチ、プレイロット、ゴミ集積ブース等で作り出されています。

またバスの通る幹線道路であっても、歩道車道間は低い縁石で一応の区別がされていますが、素材がほとんど同一で、加えて道路自体が短区間で曲っているなど、スピードが出しにくい形になっています。

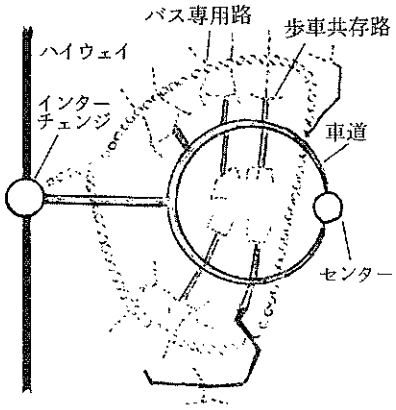
このため街全体がニュータウンでありながら旧市街地と違和感が無く、しかも街路型住宅にも拘らず、車の騒音や交通事故の心配があまりない街になっていました。

なおライズバイクにしろ、タントフにしろ、タクシーの運転手には不評で、街中を案内してもらっているあいだ中、車が走りにくいと苦情を云っていました。多分不用な車の流入を防ぐ意味では成功しているのでしょう。



デルフト・タントフ地区のボンネルフ

アルメールの計画でもタントフと同様の傾向が強く、公共交通機関であるバスの専用レーンが設けられている一方、一般の自動車はかなり走りにくくなっていて、道路の体系もインターチェンジから地区までの幹線道路も迂回して入り、かつ中心部に行くに従って細くなり、最終的には住棟周辺の共存道路となる様な、一種の行止り型の体系となっています。



アルメールの道路ネットワーク概念図

なお歩行者専用路も、日本のニュータウンで見られるような、センター地区や学校へ向う安全な通り路と云うよりむしろ、水辺や自然の中の散策路、もしくはショートカットとして多く用いられており、住宅の廻りでは日常の歩行動線と車の動線が一致する体系となっています。公共交通機関の充実を行いながらも、日常生活の中で、車が必需品となってしまっているヨーロッパの郊外住宅地、そこでの単純な歩車分離型ニュータウン計画からの脱皮の動きを印象づけられたニュータウンでした。

なお次号ではひき続いて西独における歩車共存への試みを報告します。

（どうけしゅんたろう
取締役京都事務所長）

ヨーロッパの学研都市 ②

新大学都市　ルーバン・ラ・ヌーブ

霜　田　　稔

ヨーロッパ初といわれる新学園都市として注目されているルーバン・ラ・ヌーブはベルギーの首都ブラッセルから南へ２５Kmのゆるやかな小麦畑の中に位置している。計画規模９００ヘクタール、計画人口５万人(内学生１３０００人)、総投資額２２０百万ドル、５５０億円の巨額の費用をかけて、１９７０年から建設が始まり、現在７０％位が完成している。

(1) 大学都市建設の契機

ブラッセルより東へ１０Kmのところにあるルーバン市は、ベルギー語圏に属しており、１９６６～６８年には、フランス語による教育となっていたルーバン大学に対する地域の反発が高くなり、大きな政治問題となった。このことをきっかけとして交代した政府はルーバン大学を２つの大学に分割し、フランス語による大学ＵＣＬ（Universite Catholique de Loavain）を、フランス語圏域であるブラッセル近郊のオッテーニ市の郊外に新たな中世都市ルーバンの再現として建設することを決めた。（１９７０年）

このような歴史的経過から、この大学都市は、中世都市の現代的再現と、大学町の建設という２大理念を持って計画が進められた。

一方、ルーバン大学の起源は１４２５年にさかのぼり、ヨーロッパの古い大学と同じように、僧坊から始まり、カソリック系の大学として５００年以上の歴史を持っている。

１８世紀のフランス革命によって一時中座するが、ワーテルローの斗いのあと国立として再建され、１８３４年国から独立し、再度カソリック系の私立大学となり今日にいたっている。しかし、戦後１９６０年代に入ってから大学進学への要請に対応して、政府の全面的な助成のもとに拡張が行われ、私立といえども〝半国立的〟なものとなっている。

(2) 大学都市建設計画の理念

１９７０年からプラニングが始まり、このプラニングを担当した建築学科教授レマイア氏によると、基本的には次の４つの理念が上げられるとのことであった。

① 都市としてのルーバン・ラ・ヌーブ

２０００年に５０,０００人の居住者を収容しうるよう住宅、サービス施設、学校、共同施設が有機的に一体となった集合体としての都市をめざすこと。

……高密度、混在型の都市機能配置

② ヒューマニティーとホスピタリティーに富んだ都市

都市空間を構成する建物や環境デザインの面において、特に強く強調されるのがこのヒューマニティーとホスピタリティーであること。また、この精神を持続するために９００ｈａの全敷地は大学の所有として、立地機関には９９年の期限付き借地権としていくこととなった。

③ 歩行者優先の町であること。

既存の町の車公害を排して、徹底した歩行者優先のまちとし、町の中心部（鉄道駅）ま

で歩いて１０分約１１００ｍの範囲に、住宅及び大学施設を配置したこと。車は、主要な道路のみとし、都市の要所要所に駐車場を配し、都心部においては、地下道、地下駐車場として、完全な歩行者との分離をはかっている。(図１)

④　多様性を持った都市空間の演出

居住者の生活に適するように、機能の多様性と共に、都市の各地区が、それぞれ個性を持った建築、環境デザインの展開をはかることとしている。

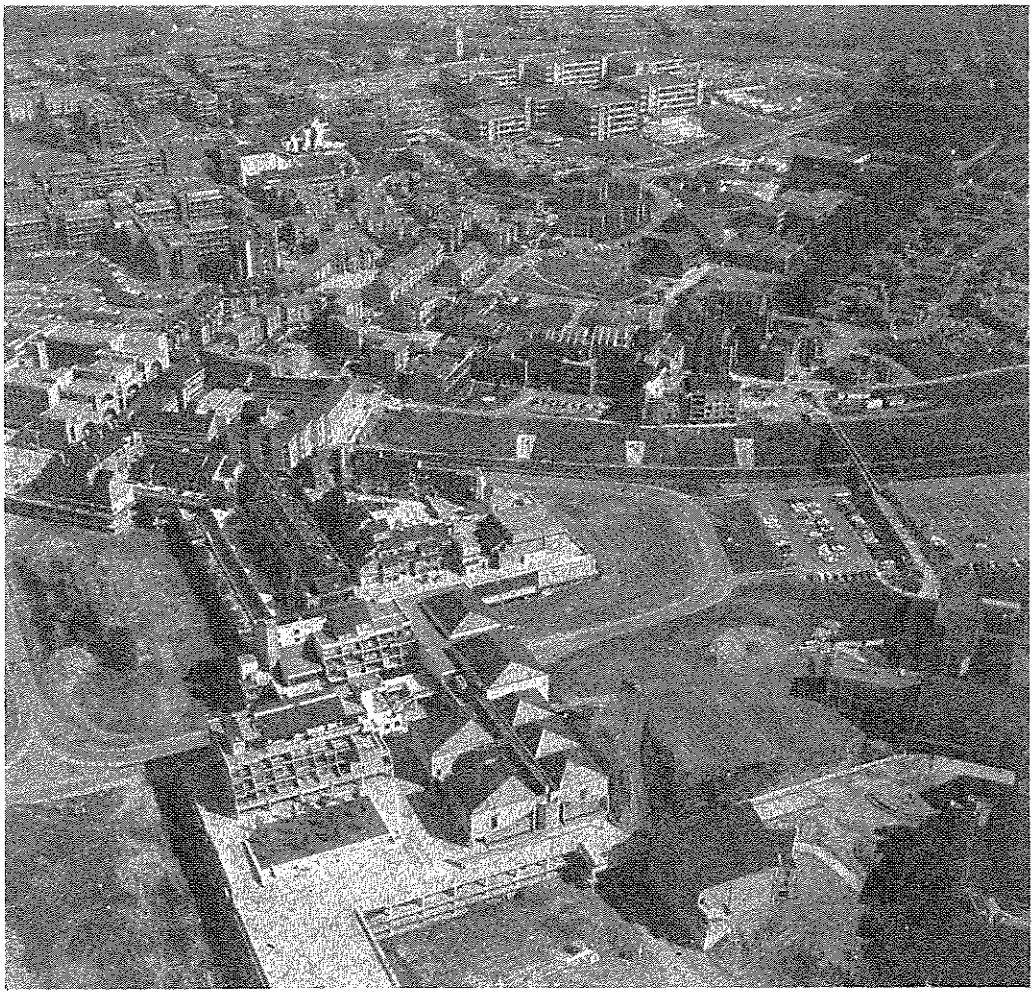
(3)　デザインポリシィー

ルーバン・ラ・ヌーブは、マレーヌ溪谷(溪谷というより、ゆるやかな谷間)に中心部を配し、これを中心にして、東西南北の４つの地区を配置するパターンとなっている。(図２)

①　機能配置

東、西のブロックに大学機能を配置し、東ブロックに自然科学系、西に哲学神学等の人文社会科学系の部門を配置している。

中心部から四方に放射状に広がる歩行者専



都心、西ブロックより東を見る

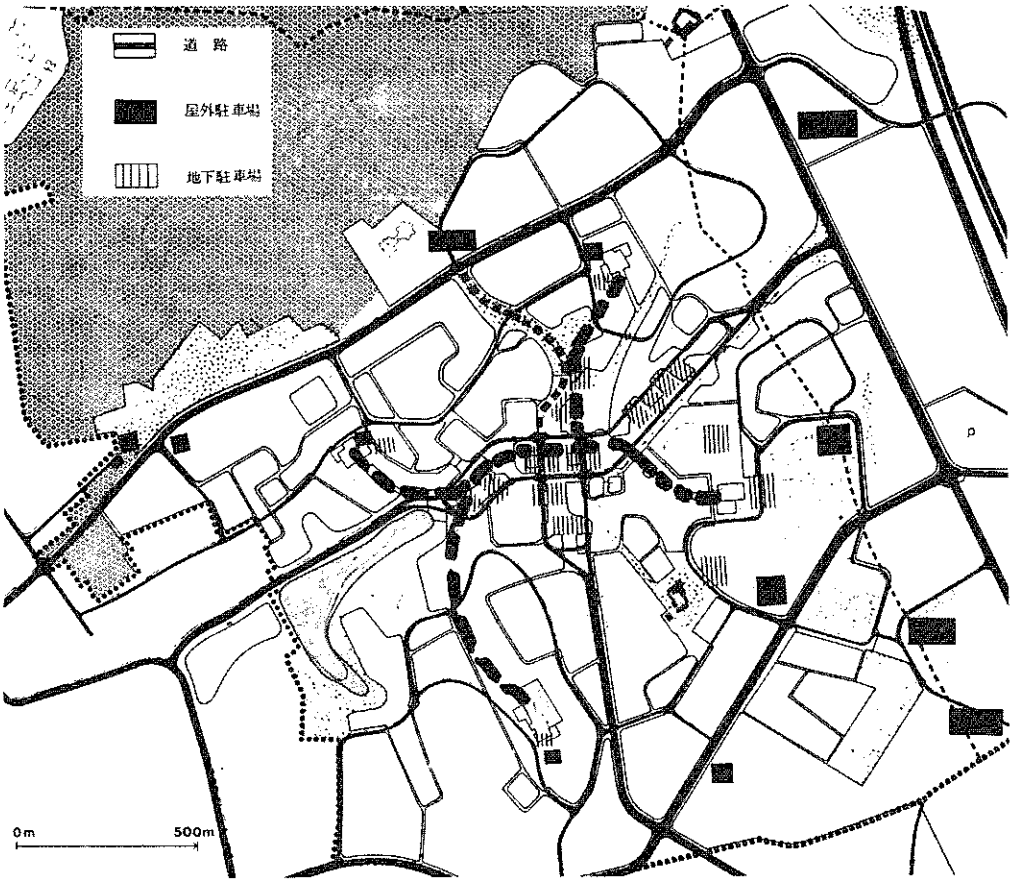


図1 交通計画、歩車完全分離（点線：歩行者専用幹線道路）

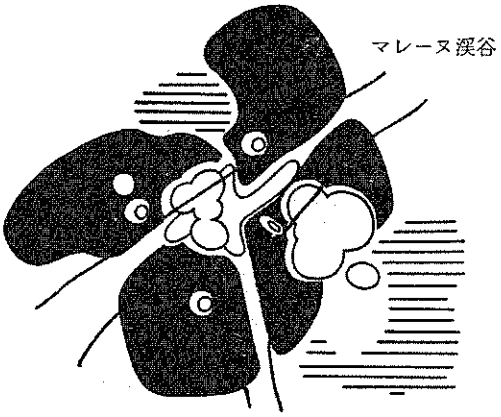


図2

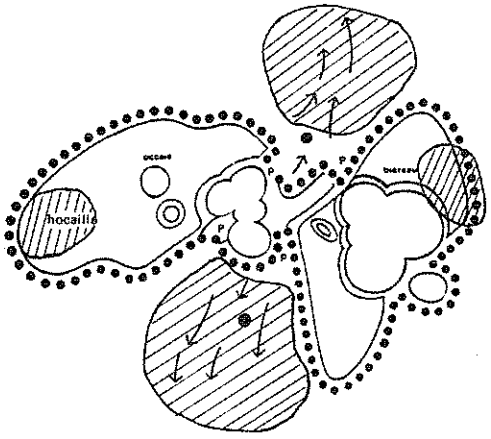


図3 今後の都市建設地区

用幹線道路沿いに共同住宅と、大学本部や、集会施設、商店を立体的に高密度混在型に配置し、アーバニィティ豊かな都市空間の形成をはかっている。北、南ブロックと周辺部に一戸建の独立住宅を配置し、又北、東ブロックは、既存の農村集落と一体となった住宅地形成が目ざされている。図3の斜線部分が、今後の後期の都市建設地区となっている。

② きめ細やかなデザインの積み上げ

全体のマスタープランにもとずいて、各地区、各施設が全体の統一性を確保しつつ、細かくデザインされている。

全体の統一は、屋根の材料、壁材としてのレンガを基調として、隣接する建物デザインとの連続的な統一性を確保しながら展開されている。これは、強力なデザインコントロールのシステムが働いているとみることが出来る。

③ 変化にとんだ都心空間の演出

この都市の計画のモデルは、イギリスのケンブリッジ市であったといわれているように、この都市の都心の外部空間は、わずか10年位の年月にもかかわらず、すでに、都市のなじみやすい樹木や、ペーブメント、壁、階段等の空間演出に成功している。駅から放射状に広がる歩行者専用の〝みち〟は、細くなったり、広場になったりし、また、大学都市らしい本屋を始めとする百数十軒の店が、一階部分を占めるなど、この都心の外部空間の多様性をより一層高める効果をもたらしている。

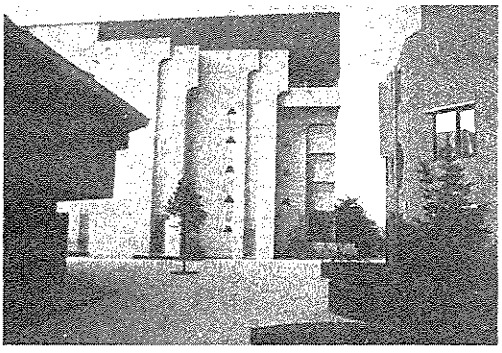
この非計画的と思われる変化を意図した細やかな計画デザインの裏側に、実に執ような都市空間演出の哲学――すなわちヒューマニティーとホスピタリティーをくみ取ることが出来よう。

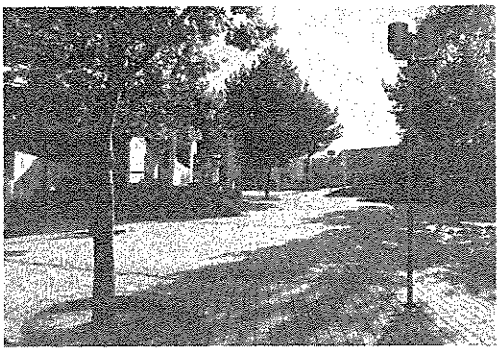
何故このように都心を大事にするだろうか。

(4) 大学の地域への貢献

ブラッセルの南25㎞のこの周辺ではあまり大きな都市はなく、5万人の大学都市建設は周辺地域へ多くの影響を与えている。

・ 大学の事業として、大学用地内に140ヘクタールの面積を持つサイエンスパークが建設され、現在予定の3分の2位の30社が立地している。今も大学自体が積極的に誘致活動を展開しており、大学施設の積極的開放を行っている。また、保育期ともいえる企業への商品企画、製品開発、市場調査等への援助が行われている。このサイエンスパークによって、現在1100人～1200人の雇用が生み出され、また地域の産業活性化の拠点としての大学が期待されている。





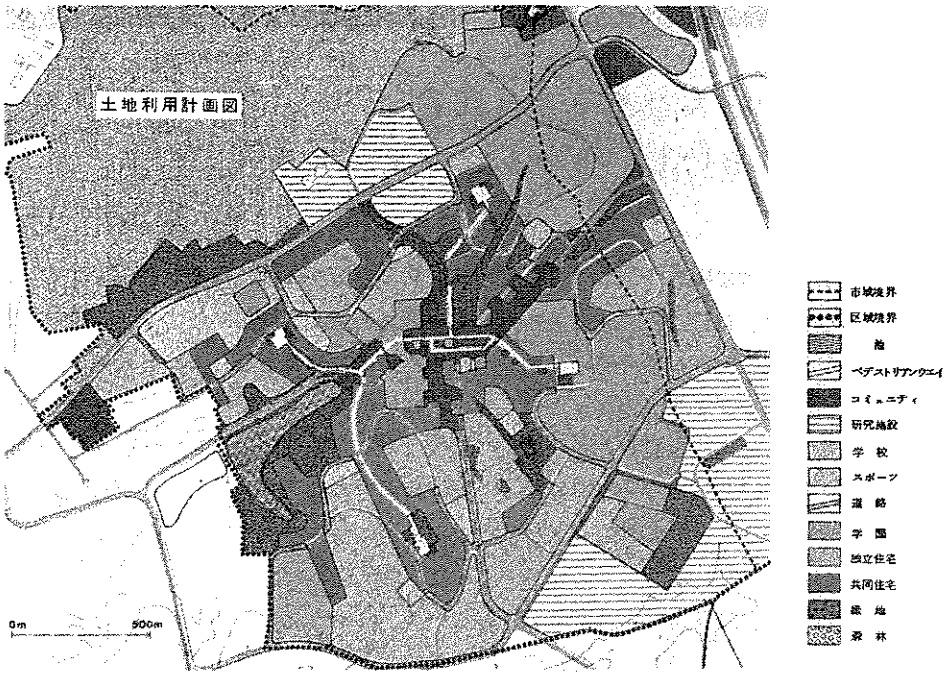


図4　土地利用計画図

・　大学は、大学の能力を活用して、成人教育、職業再訓練のコースを実施するとともに休暇中を利用しての、各種のコンファレンス、研修等のマネジメントを引きうけている。

・　大学都市の持つ教育、保育、映画館、展示場、コンサートホール、自由放送(CATV)等が地域に提供され、またこれらの施設を利用した企画、催しが、ルーバン・ラ・ヌーブ劇場集団によって主催され、年15万人の人々を国の内外から集めるなど、周辺地域住民に、多様な文化的機会の提供が行われている。

・　大学の中にあるブロクリースポーツセンターは、地方自治体、教育・スポーツ省と大学の3者によって作られ、ベルギーのこの種のスポーツセンター最大の規模であり、学生クラブ、地域のクラブ等に積極的に利用されている。又、子供達の基礎的トレーニングも活発に行われている。

・　大学都市の国家的な建設によって、周辺地域の道路、鉄道が大巾に改善されたといわれる。

大学都市ルーバン・ラ・ヌーブは、大学内における〃教育と研究の相互侵透による「るつぼ」を作る〃ことと合せて大学と都市の、〃るつぼ〃づくりが目ざされている。

この目的をより達成するためには、集積の論理を持ちにくい先端的産業を、効果的に集れんさせ、都市づくりに参加させてゆけるかどうかにかかっているといえよう。

このことを抜きにして、学生以外の残りの2万～3万人の居住者を集めることが出来ないであろう。

(しもだみのる　常務取締役)

あつと驚くハイポニカ農業
ーおいしいトマトは頭上になるー

藤　田　武　彦

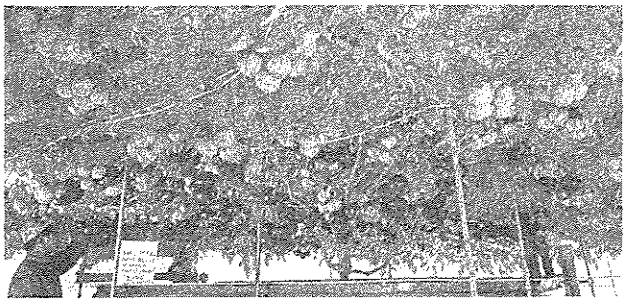
先日、農業関係の学者の卵からたよりをもらいました。それには、「最近、行政や計画サイドで、新しい農業技術をトピック的にしか扱わない傾向が強くなっている…云々」とのくだりがありました。彼らから見ると、我々のやっている事例紹介等がそう見えるのだと思います。また、そうした面も否定できないかもしれません。しかし、紹介するにしても、わからないなりに、最低自分の目で確めて紹介する努力を最大限するつもりだと、彼への返事を書きました。

ここに紹介するハイポニカ農業も、ある町の農業振興を考えるために行った事例紹介です。

「トマトが1株に12,000個なる？」どういうことかいな。また何か、きわものの類いではあるまいか。半信半疑のまま、まずは、現地の丹波篠山へいったのでした。

簡単にいえば、ハイポニカ農業とは水耕栽培技術の一種です。ただ、養液(作物の栄養源)制御の方法に特色があり、空気混入、液肥の設計、温度管理がマニュアル化されて誰でもその通りやれば同じような効果をあげられるまでに仕上げた技術だといえます。

扱っているのは協和ＫＫという会社で、社長の野沢さんは、「今、自然に育っている植物が本当に植物の能力を最大限発揮しているのか疑問に思った」「土こそ生育の障害ではないか」と、１０数年前からこの研究に打ちこまれたとききました。確かにハイポニカ栽培された作物は、生育が速く、大量にでき、かつ病気にも強く、また、糖度も高くてうまい。(昔食べたトマトの独特のうまさがあった)市場での値段も土耕ものより１～２割高く取引きされ(ハイポニカトマトというブランドが確立しつつある)、しかも、一般的な作物はほとんど作ることができ作物の規格化にすぐれています。今まで農業関係者の批判をのりこえ、科学技術庁長官賞をうけただけの力はそなえています。ただ、多少初期的な


トマトの水平放任栽培

水平放任のトマトの株元

投資(プラント代は、ハウス、設備費込みで１０ａ2,０００万円程度)が大きいのと、植物に必要な微量な元素の不足の心配や病気への抵抗力、将来的な大量生産による値くずれなど、気になる点もありますが、現時点では、農業生産のモデル的な提案として生かせそうです。とにかく気にいったのは(というより素人目には、これしか判断材料がないわけだけど)食べてみておいしかったという点につきます。

さて、これで十分友人の批判に答えたことになっているのやら、尚ハイポニカは農水省の補助対象となっていることも付記します。

(ふじたたけひこ　大阪事務所)

きゅうりの水平放任栽培

所内ゼミより

昨年行いました所内ゼミの内容です。真剣にあるいはまた面白く聞かせていただきました。講師をお願いしました諸氏諸先生方には大変お世話になりました。ありがとうございました。

2月12日	「再開発事業における事業債のしくみ」	藤川要蔵氏(京都市役所)
3月19日	「地域のシンク・タンクのありかた」	曽我一夫氏(財、滋賀総合研究所)
6月11日	「これからの都市交通」	天野光三教授(京都大学)
6月21日	「スバル・プランについて」	高橋正典氏(国土庁大阪事務所)
6月22日	「イタリアにおける地区計画について」	遠藤　晃教授(立命館大学)
		松田　博助教授(立命館大学)
6月24日	「市街地整備と防災」	室崎益輝助教授(神戸大学)
7月16日	「兵庫県の地域開発」	福田丞志氏(兵庫県21世紀創造協会)
10月5日	「拡がる公団市街地再開発事業」	山根勝利氏(住宅・都市整備公団)
10月21日	「産業政策の新展開」	米谷冨雄氏(大阪通商産業局)
11月4日	「住宅・都市整備公団の展望－家づくり、まちづくりにどうとりくむか」	増永理彦氏(住宅・都市整備公団)
11月5日	「水資源と地域計画」	池淵周一教授(京都大学)
11月12日	「住宅・都市整備公団の現状と課題」	渋谷幸夫氏(住宅・都市整備公団)
11月12日	「ソフト・サイエンス」	柳下和夫氏(三菱電機株式会社)

〝観光より健康――そして観光〟
浜坂町〝健康づくりの里〟構想その後

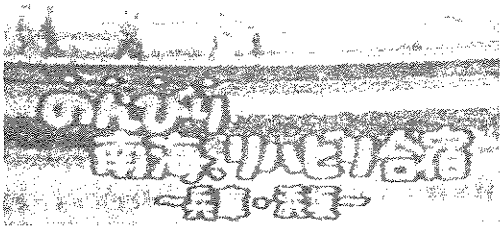
糸　乗　貞　喜

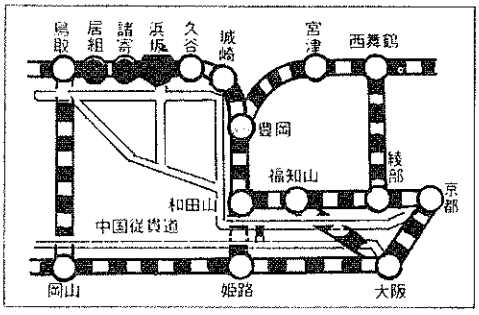
南海ホークスのリハビリキャンプ

久しぶりに浜坂町へ立ち寄ってみたのは、11月5日の朝であった。町のあちこちに〝南海ホークス歓迎〟というポスターが貼ってある。しかし、私はスポーツ新聞を読んでいないので、事情を知る由もなく、何も気にとめなかった。ところが役場についた途端に、中井町長と陰山参事からえらい鼻息でまくしたてられた。少々風邪気味の私は、風邪がこじれるのではないかと気になるぐらいの勢であった。

「南海ホークスがレギュラー全員つれて来期のためのリハビリテーション合宿に来てますよ。門田は自分1人でやるといって来てないけど、ドカベンも来て身体の検査を受けてる。はまさか荘(町営の国民宿舎)は南海ホークス貸切りですわ。」

「選手は毎日浜坂病院とはまさか荘を行き来しながらトレーニングしており、野球選手が来るだけでなしに、兵庫医大の先生も10人以上新しく来られるし、そりゃあもう大忙しです。」





「スポーツ新聞も全部来とる。毎日、浜坂のことが載らん日はない。テレビも来た。明日の夕方放映するといっとったなあ……」

「いよいよ〝健康づくりの里〟もエンジンがかかってきて、あんたらにやってもらった基本構想ピッタリのはこびになってきた。こんな利用のされ方が拡がると、健康を看板にした構想のネライが当っていたことになる。」

兵庫県の西北端のまち
京阪神から一番遠い浜坂町

浜坂町といってもご存知の方は少ないかもしれない。吉永小百合の〝夢千代日記〟は高視聴率で、今度3回目の連作を放映するそうだが、その最初のドラマのスタートが、主役の男性が浜坂駅を降りて来るところだったと思う。

浜坂町は兵庫県の西北端の町で、もともと民宿中心の温泉場はあったが(七釜温泉)、遇然なことから町役場の近くから大量の良質の温泉が噴出した。その活用も含めて町の振興基本構想づくりの相談があったのは昭和53

年の春頃だったと思う。お手伝いさせてもらうことになり、町役場へ伺っていろいろ事情を聞いた。

「県域の一番はずれで、県庁へいくには3時間もかかるし(鳥取市へは40分ぐらい)、県はわれわれのような辺地の町は全く面倒見てくれん。」

「もともと美方郡の中心で、昔は日本海舟運の泊で商業の中心だったし、浜坂針といって特色ある産業もあったんですが、今では地場産業といえるようなものもないし、鳥取が近いので町民でさえも毎週鳥取までマイカーで買物にいく仕末です。まあ特徴のないのが特徴といった町です。」

町内を方々案内してもらったり、いろいろな話を聞いたが「特徴のないのが特徴」というように、相対的には減少したもののちょっとした商店街はあるし、人口も微減、横這いといった程度であり、過疎化がはげしいというわけでもなく、あまり変ったところはなかった。

「温泉が出たからといっても、近くに城崎温泉や湯村温泉がありますし、もっと広く考えるとこの程度の温泉はいたるところにあります。また国立公園で景色がいいといっても日本中こんな景色は普通だし、海岸線はいくらか特色があるが、あれだけでは〝売れるほどの特色〟にはなりませんよ。」つめたい言い方ではあるがこう言うよりなかった。

「今頃になって観光でもやろうかと言ってみても、今や観光客は減少気味で、どこでも問題になっている。今さら知名度もないのに他の有名な観光地を追いかけてみても〝デモ観光〟では迫力がないし、成功おぼつきませんよ。少なくとも〝何かがある、他にない特色がある〟ということでもないと、客は来んのとちがいますか。」

〝健康づくりの里〟の玄関浜坂駅前

何か特色をさがして

今から考えても相当クールな打合せをしていたように思う。とはいっても農業の展望があるわけではなく、商業はすでに鳥取県西部全体を商圏にもつ鳥取市に喰われている状態であり、考えるとすればいくらか立地してきている工業であるが、これとても立地条件という点から見ると兵庫県下で一番京阪神から遠い町であることに変りはなかった。交通条件がいくら悪くても可能性を追求せざるをえず、振興基本構想の柱は工業誘致と〝デモ観光〟ということにならざるをえなかった。

とにかくキャッチフレーズと活用のキメ手を一体的に出す必要がある。

豊かさを求めた高度成長期も終り、今後は安全とか健康が人々のニーズになることは一応予想できた。そして健康が社会の関心の大きな部分を占めつつあったが、健康がそう簡単に商売になるとも思えなかった。大都市中心部のスポーツジムでも経営が上々というわけではない。まして交通条件もよくない。こ

うした悩みの中で町の職員と私たちが一緒になって頭をひねった。そして出てきたのが「今さらいっても仕方がないのなら〝観光〟という言葉は今後使うまい」、「〝健康、健康〟といいながら観光の勝負をするということでどうだろう」ということであった。

まず地方区を目指す

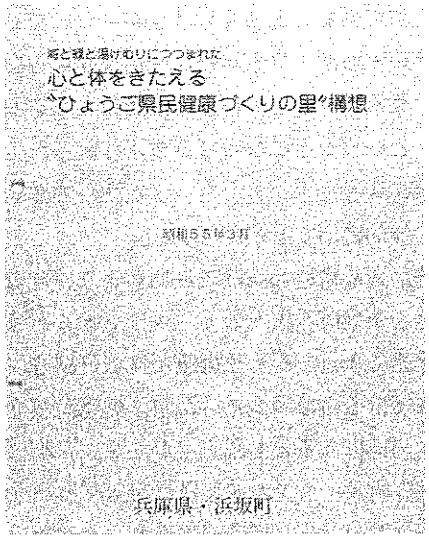
もう一つ問題がある。それはエリアマーケッティングとでもいうのか、集客目標区域の問題である。何度もいうが知名度はないし交通条件も悪い。そこから「一足飛びに全国区に立候補してもおぼつかない。まず地方区(兵庫県内)をねらおう。その中で知名度や施設水準を上げ、その実績の上で近畿区をねらおう」という考え方を取った。

健康づくり観光地となれば、それに対応するいろいろな施設を造っていかねばならない。公共団体や民間のいろいろな制度や補助を縦横に組み合わせて資金導入をはかるしか方法はない。そのためには兵庫県が応援してもいいと感ずるようなオリジナリティーと公共性が必要である。これらの考え方が〝ひょうご県民健康づくりの里〟というテーマに結合された。

基本構想策定後今日まで町役場の努力は大変なものだった。一方県庁の方でも各部局からこのテーマに対して全面的なご支援をいただいた。通産省からも町内市街地の温泉配湯事業に対して省エネルギー関連の補助金をいただいた。今のところ順調すぎる出足である。そこへ町の努力で、南海ホークスのリハビリ合宿が実現し、近畿区への足がかりのようなものができてきた。早すぎるようなテンポである。これで鼻息が強くならなければおかしいかもしれない。

今後まだいろいろ問題が出てくるかもしれないが、町役場と町民の努力で〝健康づくりの里〟を実現していかれると思う。このつたない私の紹介文をお読みいただいた方も、カニを食べに、あるいは海水浴に足を運んでいただきたいと思います。

(いとのりさだよし　専務取締役)



編集後記

やっと4回出せました。この間、声をおよせいただいた方もあり、お礼を申し上げます。いずれまた、いろいろおうかがいしたいと思っております。その節は、よろしくお願いいたします。まだまだ満足のゆくものが出来ませんが、とにかく〝継続こそ力なり〟の意気で取り組んでまいります。今年もよろしくお願いいたします。　(やました)

一知半解

ごみはなぜ増えるか

小泉春洋

ごみは①工場等生産系から排出されるもの②商店等流通系から排出されるもの　③家庭系から排出されるものの３つに分けられる。このうち、①はほぼ産業廃棄物に、②は事業系一般廃棄物に、③は家庭系一般廃棄物として扱われているのが現状である。市町村に処理義務のあるのは②及び③であると現在の廃棄物処理法では解釈されている。

このため、市町村の廃棄物排出量として統計にあがってくるものは②及び③である。他の統計データも同様であるが、この市町村の廃棄物排出量のデータを使う場合、それが純粋に家庭だけのものであるか又は商店、飲食店等の事業所を含むものであるかを注意し、市町村相互間の比較をしなくてはならない。

京都市のデータを使ってこの違いをみると市処理量の約４０％が事業活動に伴って排出されたものといえる。（表１）

なお、ここ４年間ほど京都市の一般家庭を中心にそのごみ量やごみ質を調査してきたが、その調査結果では一人一日当たり約４５０～５００g程度であり、下表の家庭ごみ（市収集ごみ）中にもまだ小規模な商店や飲食店の事業活動に伴うごみも混入しているものと予想される。

この家庭生活から排出される４５０～500g／人・日のごみ質を調査してみると、重量では厨芥類が約４０～５０％を占め、約半分は台所から出ているといえる。また、容積でみると全体の約６０％を容器・包装材が占めていることがわかった。

家庭ごみの排出量はオイルショック以降数年間は減少したが、最近では当時の排出量をも越えるようになってきている。（図１）

人間が食べる食品の量は終戦直後は別として最近でも増加しているとは考えられない。他方で容器・包装材の生産量は近年でも増加している。この２つを考え合わせると、過剰包装、使い捨て容器、トレイ・ラップ包装といった容器・包装材が近ごろのごみ量増加に大きく寄与していると考えられる。

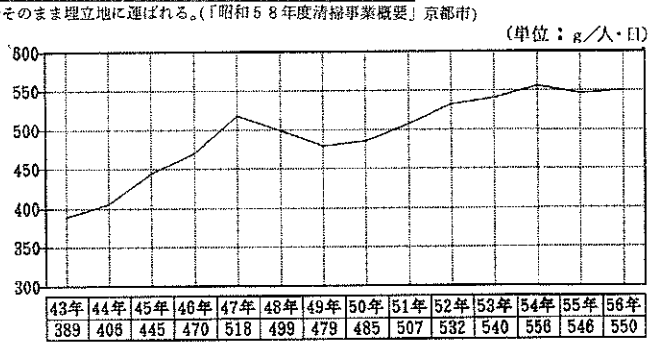
（こいずみはるみ　大阪事務所）

表１　京都市が処理するごみ（昭和５６年度）

	家庭ごみ（市内集ごみ）	事業系一般廃棄物（業者収集ごみ）	小零細企業ごみ（市民持ち込みごみ）	計
処理量（t）	312,923	144,436	83,754	541,113
構成比（%）	57.8	26.7	15.5	100.0
一人一日当たりの排出量（g／人・日）	580	268	155	1,003

注）市民持ち込みごみの半分はガレキ等でそのまま埋立地に運ばれる。（「昭和５８年度清掃事業概要」京都市）

図１　一人一日当たりの家庭ごみ排出量の推移



まちかど

水島港のサイン

三輪　泰司

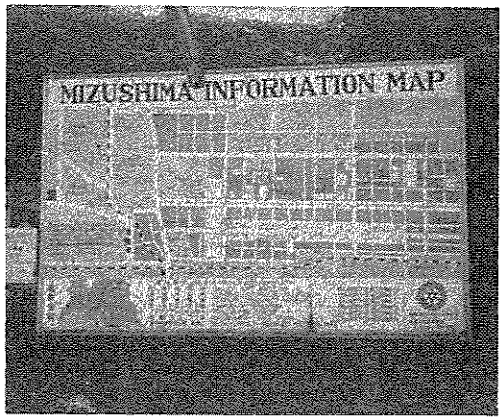
みなとは、ロマンとペーソスに包まれたエキサイティング・スポットであること、昔も今もかわらない。

岡山県倉敷市にある重要港湾水島港は輸出入総額で全国第9位、7千6百億円、年間の入港船舶65,536隻のうち外航船舶は2,017隻3%にすぎないが総トン数では56.8%、3,730万トンを占めている。(昭和56年)

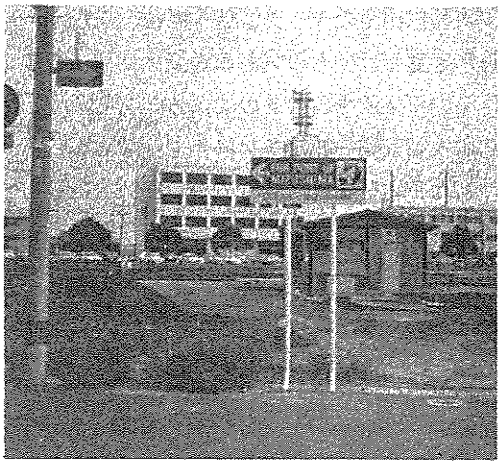
工業港であるからバースの様子もお客のタイプも神戸や横浜とはちがって華やかとはいえないが外航船舶の上陸船員は年間約5万5千人、内、外国人は60%の3万6千人ほどである。(昭和56年)

港の一番奥で水島の市街地に近い税関など管理施設の前にランチのつく桟橋がある。税関ビルの脇にさゝやかな船員待合所がある。案内板は倉敷南ロータリークラブと水島工業高校インターアクトクラブが寄贈したもの。

この上陸地と市街地の間は、いま道路と公園などが整備中でまだ殺風景である。県の水島都市開発事務所の職員がデザインした案内板は、街の方へはショッピングを楽しむアベックを、港の方へは船をユーモラスにあしらっている。　(みわひろし　代表取締役社長)



船員待合所横の英文案内図


市街から港への帰りの方向を示す。案内板向うの白いビルが税関。この間の広場が公園になる。

ARPA・K ㈱地域計画・建築研究所

ARCHITECTS, REGIONAL PLANNERS & ASSOCIATES, KYOTO

本社 京都事務所	〒600	京都市下京区四条通り高倉西入ル立売西町82 TEL (075)221−5132(代) (大和銀行京都ビル8階)
大阪事務所	〒540	大阪市東区石町1丁目1番地 TEL (06) 942−5732(代) (天満橋千代田ビル2号館)
名古屋事務所	〒460	名古屋市中区丸の内3丁目18番30号 TEL (052)962−1224 (ツボウチビル6階)
九州事務所	〒810	福岡市博多区中洲中島町3-3　児島ビル3階 TEL (092)281−2349